（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（経済学）	氏名	羽田祥子
論文題目	起業家から見たオープンイノベーションマネジメント： スタートアップによる提携相手選択と防御と学習に関する定性研究		

（論文内容の要旨）

本研究は，新しい技術や知見を核として成長を目指すスタートアップが，オープンイノベーションにおいて既存大企業との関係をどのようにマネジメントしているのかを探求した質的研究である。関係性における不利益から自社を守るためにどのような防御や相手選択を行い，またそれらの知恵をどのように学習しているのかを具体的な研究課題としている。この課題について，日本のスタートアップ 41社の50名の起業家への半構造化インタビューデータを収集し，これを用いて事前の理解を前提とする解釈学的立場を採用した質的テキスト分析の手法による概念化を行った。既存研究で理論ごとに説明された防御行動を網羅的に検討して理論間の相互関係を議論したことや，スタートアップ組織と不可分な個人である起業家の感情の側面に着目して提携相手選択を論じている。

第１章における研究課題の提示に続き第２章で既存研究を検討した結果，スタートアップとオープンイノベーションについては外部能力を導入して活用するという大企業の視点で主に議論されていること，起業家個人が組織の判断に影響を与える側面についてほとんど議論されていないこと，資源を依存する立場が強調されていること，専有可能性や情報の経済学，資源依存理論，ネットワーク理論等で説明された防御の網羅性や理論間の相互関係が充分に議論されていないことが分かった。

第３章において研究方法を提示し，それにもとづき，第４章において，個人としての起業家の存在がスタートアップ組織とは不可分であることや，起業家が感情を持つ個人であるという側面に着目することによって，スタートアップの提携相手選択における社会的・心理的側面を「覚悟」と「矜持」として独自の概念化をした。大企業が新事業を切り拓く覚悟を見極める目や，実際にリスクを負って新領域を開拓するスタートアップ側の矜持に対する大企業の態度を見定めるとともに，大企業にその提携相手としてふさわしい覚悟があるのかを問う心情が，相手選択基準として表れていることを議論し，組織コミットメント概念の援用によって提携相手選択の議論を深める可能性を示した。

第５章では，提携相手による不正盗用など非対称な関係性におけるリスクに対する防御メカニズムを概念化し，多くの起業家が工夫を凝らし知恵を組み合わせた防御行動をとっていることを示した。また大企業の豊富な資産がスピードを妨げる逆機能ともなって防御となる側面があることや，投資を「受ける」ことで投資側の行動を妨げて防御となる行動，「自身を」監視させることで逆に相手をガバナンスする行動など，同じ変数が理論間で異なるメカニズムとして説明されている状況を指摘し，理論間の相互関係を議論した。

そして第６章においては，相手選択や防御の知恵をどのように身につけたのかという問いを立て，オープンイノベーションに関する起業家の学習のプロセスについて探求した。大企業との関係性における直接的な経験に直面した時の感情が行動を駆動して学習につながっていること，外部に原因を帰属させる負の感情が学習につながる行動を駆動していること，起業家とは異なる過去の経歴が状況的学習となって他者の経験からの学習を深めていることを議論した。

最後に第７章で，本研究の結論について整理した上で，本研究の貢献と限界について議論した。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本研究は，オープンイノベーションの文脈における大企業との協業や提携において，スタートアップの大企業との関係のマネジメントのあり方について探求した質的研究である。技術系スタートアップの大企業との提携に関する既存研究をふまえた上で，起業家側の相手企業の選択，防御行動，およびそれらを実現する学習という３つの点でリサーチギャップを明示し，50名の起業家へのインタビューによって収集されたデータを用いて，そのあり方について概念化を行っている。

論文では，いくつかの独自の概念が提示されている。提携相手の選択については，スタートアップ組織と不可分な個人である起業家の感情の側面に着目して「覚悟」と「矜持」という二つの概念を提示している。防御行動については，網羅的な防御行動の概念化を通して，社会・心理面に焦点をあてた知恵を駆使したソフトな防御策を張り巡らしていることが示されている。さらに，それらを起業家が学習するにあたり，外部に原因を帰属させる負の感情が学習につながる行動を駆動していること，学習に状況性が伴っていることを議論している。これらの起業家としての個人の側面の影響を反映した概念を，具体的なエピソードと関連付けながら示した点に，この論文の特徴がある。

この研究の特に評価すべき点は三つある。第一に，研究課題に対する視点の独自性があげられる。スタートアップと大企業の提携や協業という先端的な現象を取り上げ，大企業の盗用行動への社会的防御策という独自の論点を掘り下げたことや，従来稀薄であった起業家個人の感情や学習に注目しているという点で，理論的にも実践的にも，意義ある課題設定であったと高く評価できる。

第二に，豊富な一次データを収集して研究を実施していることがあげられる。この分野の日本の研究では過去にあまり例を見ない数である50名の起業家にインタビューを実施し，さらにそれを全てテキストに起こしたうえで，丁寧に質的テキスト分析を実施している。豊かな独自データを用いた分析で実態について詳細に記述できている点は，非常に高く評価すべきである。

第三に，研究を通して提示された概念の独自性があげられる。この研究では，既存研究の理論をふまえつつ，質的分析によって，「覚悟」と「矜持」による相手選択，「知恵による防御」，「感情」と「状況性」による学習などの独自の概念を提示している。さらに，それらの概念の既存研究に対する理論的意義を明示しており，この論文が設定した課題に対して深い洞察を与える研究成果を提供できていると評価する。

このように，この論文は，オープンイノベーションや大企業とスタートアップの提携に関する学術研究の流れを押さえた上で，質的研究によって新しい概念を構築するという，学術的貢献が明確な研究であるが，いくつか問題も残されている。

第一に，防御策のタクティクスに関する発見事実の理論的解釈については，さらに深い検討が必要である。大企業からの出資を，エージェンシー関係についての逆ガバナンスという理論的解釈をしているが，これは従来の枠組から見た知恵とタクティクスによるパワー関係の変化が出資関係の意味を変化させていると解釈することも可能であり，説明力が十分に高いとはいえない面もある。

第二に，全体を通して，制度化された知識と個人的信念を伴う知識を区別することができたのではないかという点があげられる。例えば，起業家の学習については，起業家の大企業対策の熟練度の水準に応じて，起業エコシステム内の制度化された対策と信念化された高い水準の「知恵」では，学習のあり方も異なっ

ていた可能性がある。

第三に，概念の適用条件が，明示されているべきであった。文中にも言及されているように，この論文では，複数の調査対象で共通で見られた行動を概念として網羅する形で提示しているものの，それらがどのように相手企業との選択や大企業からの防御に機能しているのかについて，比較研究として因果関係を解明できているわけではない。因果関係を解明する研究を実施し，概念の適用条件を明確にしていくことは，今後の課題であろう。

以上のような問題点はあるものの，これらはこの研究のさらなる発展のために今後取り組むべき課題というべきものであり，スタートアップの視点から大企業との関係のマネジメントのあり方について探求したこの論文の学術的価値を損なうものではない。よって本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお，令和３年２月２４日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。